

学びの広場



京都市教育委員会
教員養成支援室
令和8年1月17日 No.8

第7回の専門講座では、午前2講座・午後2講座の計4講座を実施しました。志望する校種・職種に該当する塾生にとっては、それぞれに求められる資質や専門的な知識、日々の教師の実践について学びを深めることができました。また、小学校や中学校を志望する塾生にとっても、高等学校や養護教諭、総合支援学校、栄養教諭の役割や児童生徒への関わりなどについて学べる貴重な機会となりました。こうした学びを通して、校種間のつながりを意識したり、様々な職種の人と連携し、チームとして児童生徒を育成したりしていくことの重要性、さらに広い視野で学校教育を捉えることの大切さに気付くことができました。

講義後の全体会や分散会では、講師の方に積極的に感想を伝えたり、さらに知りたいことを質問したりする姿が見られました。こうした姿からは、これまでの学びを積み重ねた塾生の主体性や成長が確かに感じられました。本日が最後の教育学講座となります。入塾当初の自分と現在の自分を見つめ、教育観や児童生徒観、授業観にどのような変化が見られましたか。今一度、自分自身の姿を振り返り、これまでの学びを糧にして、授業実践講座①②に臨むことを期待しています。

第7回京都市教育学講座[高等学校専門講座] 学校指導課 竹下 玄太 指導主事 『高等学校における教師の実践』

塾生のレポートより

高等学校専門講座を通して、京都市にある各高等学校の特色や高等学校の教育として求められるものについて詳しく学ぶことが出来た。京都市のそれぞれの学校には様々な特性があり、一人一人の生徒の個性や能力を最大限に発揮させられるような教育がなされていることを理解した。講座の中で特に印象に残っているのは、高校生は大人になるための最後の段階であると述べられていたことである。この言葉から、高校教育には学力の向上だけでなく、生徒一人一人が自立した社会人として生きていくための人間性や価値観を育てる役割があるのだと考えさせられた。また「おもしろい」が生徒のやる気に火をつけるという発言にとっても関心を持った。生徒が学びに主体的に向き合うためには、「もっと知りたい」「やってみたい」と感じられる工夫が不可欠であると感じた。教員の関わり方や授業の構成次第で、生徒の学習意欲は大きく変化することを改めて認識した。

そして分散会を通して、生徒との信頼関係を築いていくためには些細な声かけが大切であるということに気づいた。生徒指導や面談の実施だけでなく何気ない一言や日常的な関わりの積み重ねが、生徒の安心感や教員への信頼につながるのだと理解した。

私は講座や分散会で学んだことを通して、自分が志望する専門教科の「おもしろさ」や大人になるための最後の段階としての生徒に対するサポートについて考えていきたい。私は公立高校の英語教員を志望しており、英語の「おもしろさ」とは何かを改めて考えていく。また教員としての経験を積んでいき学校に行くことの「おもしろさ」や「楽しさ」についても考え、生徒に伝えていけるような教員を目指す。そして大人になるための最後の段階としてふさわしい生徒へのサポートのあり方はどのようなものであるか理解を深めていきたい。その際に社会の一員となれるような生徒を育む視点や、生徒の人間性を育む視点などから考えていくべきである。

市内の各校がスクールミッションやスクールポリシーを設定し、それぞれ特色があることを学べました。生徒は自分の未来に繋がるだろう学校を選択して入学してきます。高校卒業時でのさらなる進路選択において、学力的にも人間的にもその生徒の最大限の成長をもって挑んでほしいですね。そのために、高校の教師に求められる力として、〈専門性に裏づけられた教科指導力〉を言われていました。そして、[自分の「おもしろい」が生徒に火をつける]とありました。教科の力をつけ、その魅力を存分に生徒に伝えてください。「未来をつくる「人」をつくろう」という言葉もありました。レポートの最後にある『大人になるための最後の段階』として見つけた視点を忘れずにいてください。

～クラス担当スタッフからのコメント～

第7回京都市教育学講座[養護教諭専門講座] 体育健康教育室 北島 美喜 指導主事 『求められる養護教諭像』

塾生のレポートより

今回の講座を通して、子どもたちが学校で学び、楽しみ、安心して生活するためのすべての土台には「健康」があるということを強く実感した。その健康を日々の学校生活の中で支えているのが養護教諭であり、自分が目指しているこの仕事の意味の大きさを改めて考えさせられた。講義では、保護者や他の教職員の視点から見た養護教諭への期待が示され、養護教諭志望者以外の受講生と意見を交わしたことで、養護教諭の職務が十分に伝わっていない現状や、互いに何を求めているのかを言葉にしてすり合わせることの大切さにも気づかされた。とりわけ、教職員が養護教諭に求めているのは、保健室でしか見せない子どもたちの姿を共有してもらうことであり、教室と保健室をつなぐ存在としての役割の重要性を感じた。

また、救急処置の話の中で、ネイルや化粧が健康観察の妨げになるという説明があり、爪や唇の色、表情、しぐさといったわずかな変化を読み取ることが、養護教諭の専門性として生徒指導にもつながっているのだと気づかされた。これは単なる身だしなみの問題ではなく、子どもの命や健康を守るための判断に直結する重要な視点なのだと学べることが出来た。

さらに、講義の感想の中では、「養護教諭がいないからけがをしないように」という言葉に違和感を覚えるという意見が出ていた。その言葉を聞き私は、養護教諭がいる・いないに関わらず、いつどんなときでも子どもたちの命と健康が守られるような環境や体制を整えておくことこそが大切なのだと、はっきりと意識するようになった。保健室の配置や物品の整理、緊急時の動き方を明確にしておくことが、その基盤になるのだと思えた。

また、「信頼される養護教諭」とは何かを考える中で、救急処置や健康相談における確かな専門性が子どもや教職員の安心につながり、その積み重ねが連携に繋がっていくのだと思えた。いざという場面での確に対応できる姿こそが、養護教諭としての信頼の土台になるのだろう。

さらに、助ける・助けられる関係を日常から築くことの大切さや、養護教諭にはニュートラルな立場で子どもに寄り添いながら、時には背中を押す指導力と心の余裕が求められていることも印象に残った。私は、養護教諭には知識に裏付けられた想像力が不可欠だと考えており、その力を高めるためにも、学びと経験を重ねながら、子どもの背景まで見通せる養護教諭を目指していきたい。

養護教諭の専門的な講義を聞いたことと小・中の教諭を目指している塾生と交流できたことで改めて学ぶことの多い講座でした。学校は子どもが健康に毎日を過ごす場所、命を守り切る場所でありその要の役割を担うのが養護教諭です。専門性が信頼の土台。そして専門性からの想像力、総合的な判断力を付けるために経験を積み上げてほしいです。でも決して一人で担うのではありません。それが体制づくりですね。学校の規模や状況に合わせた体制、研修の充実が教職員全員の連携、助ける・助けられる関係につながることも学びました。子どもも教職員も笑顔で元気な学校を目指して頑張りましょう！
～クラス担当スタッフからのコメント～

全体会・分散会の様子

高等学校専門講座



養護教諭専門講座



第7回京都市教育学講座[総合支援学校専門講座] 総合育成支援課 大藪 晶 指導主事 『総合支援学校における教師の実践』

塾生のレポートより

私は今回の講義で、子ども達を「できる存在と捉える」ことの大切さと、教員側が何をどのように支援していけば良いかを考えることができた。子ども達にとって様々な教育活動や授業で初めて経験することは、方法がわからず不安で一杯である。その不安を自信に転換させるために、「模範を示す/見通しを明確に説明にする/目標設定を段階的に設ける」など、子どもの特性や状況に応じた対応に工夫が必要であると感じた。また教室環境では掲示物にも工夫をして、子どもがその日のスケジュールやその時やることを視覚的に捉え、生活リズムを掴んでいきやすくされている写真の説明があった。子どもにとって「この場所は安心できる場所」と認識してもらえるように安全面に配慮したりいつもどおりの配置に留意したりして、籍を置く教室だけでなく学校全体が安心してもらえるようにしたい。また、通級による支援制度を利用する子どももいるので、職員全体で足並みが揃うような教室環境づくりも必要ではないかと感じた。

分散会では「子どもの困りを予見した支援の充実」を挙げた。先日の花背山の家でのフィールドワークでの先生方の声掛けや動線がわかる連携が取れた配置、活動する塾生への寄り添い方などからも感じていたことである。指導案作成時の「指導上の留意点」の欄を如何に埋められるかが今の私の直面していた課題であり難しさを感じていたが、子どもが安心して活動に専念できる環境や授業づくりを考えることで克服をしていきたい。分散会で「教師は子どもの困りに対してどこまで手を差し伸べるべきか」で事例検討をする場面があったが、当初の活動の目標からその子どもに応じた『副目標』を多く見出し、段階的な達成を繰り返すスモールステップの意見を班員で広めることができた。子どもの成長を螺旋が上昇していくように考え、成長できる機会づくりを心がけて、授業実践講座や実地研修などの実践に活かしていきたい。

また、『個別の包括支援プラン』については、実計画に基づいて関係教員や機関がどのように対応を変えているのか、見直しのタイミングや計画決定までの協議の場などの理解を深めていくことが、新たな課題であると感じた。「この支援がいい」と認識を一人歩きさせず、指導要領を始めとした根拠ある支援の術を見つけていきたい。

現場での経験がないにも関わらず、講義の中で塾生に向けて、『学習指導要領の「自立活動」における区分や項目』についての質問があった時に、すぐに答えることができました。また、講師から紹介された書籍等もすでに持っているなど、総合育成支援教育に対する意識が高いことが感じられます。子どもの特性や状況に応じた対応への工夫では、学校全体、教職員全体でその環境づくりに努める必要があるのではないかと考えている点に学びの深まりを感じます。これまでの教師塾での学びや経験が少しずつ線としてつながっていく様子は、自身にとっても「螺旋が上昇していく」ようですね。3者（本人・保護者・学校）の願いを大切にすることが、「根拠のある指導」につながります。思いを伝え受け止める、コミュニケーション力や人間力にさらに磨きをかけていきたいですね。

～クラス担当スタッフからのコメント～

全体会・分散会の様子



総合支援学校専門講座



第7回京都市教育学講座[栄養教諭専門講座] 体育健康教育部 山本 朱音 指導主事 『求められる栄養教諭像』

塾生のレポートより

今回の講義「求められる栄養教諭像」を受け、講師として現場で働いている立場でありながら、改めて初心にもどり、栄養教諭という仕事に何が求められているのか、どのように働いていくべきなのかを考え直すよい機会となった。日々の業務に追われる中で、目の前の仕事をこなすことに意識が向きがちであったが、今回の講義を通して、栄養教諭は給食管理をする・食に関する指導を行うだけの存在ではなく、子どもたちの将来の食生活や健康を支える大切な役割を担っていることを改めて感じる事ができた。

講義では、給食の歴史や栄養教諭の仕事内容、社会人としてのふるまいなど、基本的ではあるが、あらためて見直す必要のあることを多く学んだ。その中でも特に印象に残ったのは、「給食は生きた教材である」という言葉である。年間197回ある給食の一回一回が給食指導の場であり、栄養教諭がどれだけ思いをもって関わるかによって、子どもたちの食への興味・関心は大きく変わりものと感じた。子どもたちは基本的に給食を楽しみにしており、給食時間での出来事は記憶に残りやすい。そのため、給食メニューに関する動画やクイズなどを取り入れ、楽しい雰囲気の中で学べる工夫をすることが大切だと分かった。

また、今回の分散会では、同じ職種で若手の参加者が多く、ふだんの仕事で感じている悩みや疑問を話し合うよい機会となった。周りの目を気にして新しいことに挑戦しにくいことや、自信が持てないことなど、出てきた意見は自分の考えと重なる部分が多くあった。その中で、まずは一歩ふみ出して挑戦し、経験を積み重ねていくことの大切さを学んだ。ただし、何でもやってみるだけで終わるのではなく、振り返りを行い、自分の課題を考えながら成長していくことが重要であると感じた。

今回の講義で得た学びをこれからの実践に生かし、子どもたちにとって給食が「楽しい」だけでなく「学びのある時間」となるよう、日々考え続ける栄養教諭でありたいと感じることが出来た。

今回の講座を通して「栄養教諭という仕事に何が求められているのか、どのように働いていくべきなのか」について考え直す機会となったようですね。子どもたちの将来の食生活や健康を支える大切な役割を担っていることを改めて感じる事ができたようですね。「給食は生きた教材である」という言葉も印象に残ったようですね。そして、給食メニューに関する動画やクイズなどを取り入れ、楽しい雰囲気の中で学べる工夫をすることの大切さを強く考えたようですね。講座から得た学びをもとに「楽しく、学びのある時間」を作っていけるように実践にいかしてってくださいね。応援しています。

～クラス担当スタッフからのコメント～

全体会・分散会の様子

栄養教諭専門講座

